

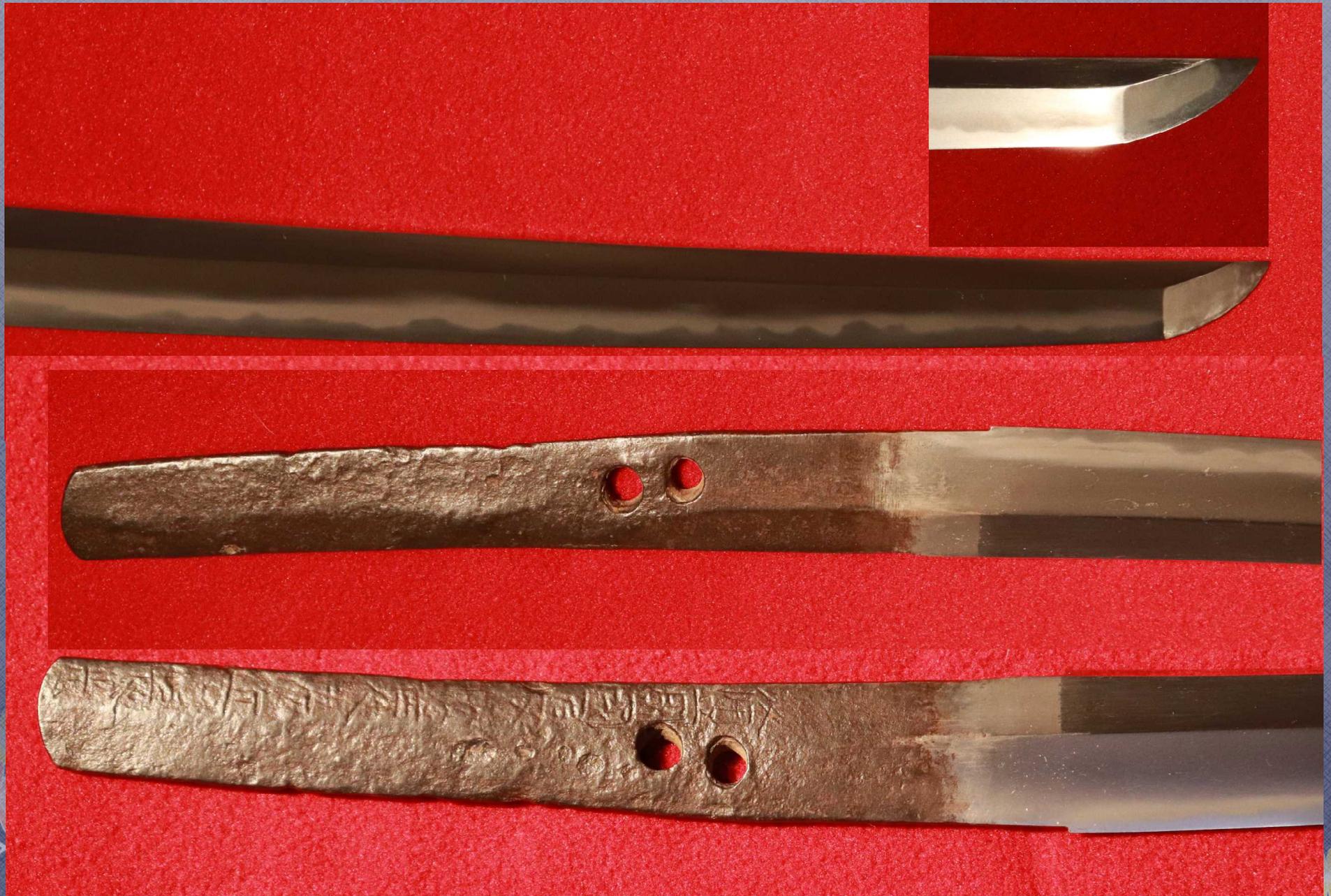
備前国長船住人左近長光

法量 ●刀 刀身重量692g 刃長70.1糎 反り1.8糎 元幅2.95糎 先幅1.9糎 元重0.8糎 先重0.5糎 鋒長2.9糎
茎長さ18.8糎 刀身+茎合計重量1008g

仕様は長光には見ることの少ない小太刀、鍛えは、よく錬れた肌に部分的に木目肌がながれ、全般的に映りがたつ典型的な備前肌で、刃文は互の目が開き気味で所々に坂がかかる片落ち互の目状となる。帽子は横手でわずかに張り、その上で細りやや湾れて丸く返る三作帽子となる。



光長近右人住船長國前備



備前国長船住人左近長光

長 光
 順、長光と左近将監、長光については、昔から同人説と別人説があつて、そのいずれとも断定しがたい。別人説では、初代長光は光忠の子で、法名順慶、左近将監長光は順慶の子となつており、同人説では、左近将監長光が後入道して順慶と号したとなつてゐる。

古刀鑑定編
 地鉄 太刀が多く、短刀は未見である。きわめてまれに剣がある。身幅広く、踏張り強く、鋒は猪首風になり、姿は儼として豪壮で、棒樋のあるものもある。
 刃文 乱れも少なく、沸少なく、匂出来。この作の刃文で長光と異なる点は、鏝元から鋒まで刃文の線にむらがないことである。
 帽子 乱れ込み、匂深く、返りが強い。時に小丸または焼詰め風のものもある。
 裏 肉があつて長く、上品。一字銘が多く、長銘のものは現存た一口である。
 △光忠在任の太刀と天磨上げの無銘の古きわめの作風がやや相違し、身幅広く、鋒が猪首のものはほとんど後者である。鏝元も後者が特によくつまつて、地沸細かにつき、京物に見紛れるほどであり、刃文も匂深い中に細微な小溝を見る。在銘の帽子は乱れ込み、先わずかに尖るものを見える。こうした特徴、無銘の出来の相違をいかに解すべきかに問題があるが、一応同作ながら年代の相違によるものとして今後さらに研究すべきである。〔註〕

山 備 前
 地鉄 だいたいの光忠に似ているが、直刃や小模様刃の刃文のものには、細かく美しげなやや弱気味のあるものがある。影映りはこの工の最も得意とするところで、みごとに現われたものが多い。
 219

いっさい、長光の作品は二字銘で、年号のないものが多く、銘の書体も若干大小や太い細いがあるくらいでほとんど区別がつかない。また作柄も、同じ将監長光のものでも岡山美術館のもの（正統東銘）は華やかな丁子乱であるし、御香宮のもの（永仁東銘）は淋しい小模様の互の目乱で、かならずしも一定してない。

既述のとおり、古刀の上作程度のもので長光くらしい作品の多く残っているのは他にその例が少なく、か、それらの中で時代のいぢり下つて見えるものはきわめてまれで、他は皆ほぼ同時代と見えるものばかりであるから、しいて初代、二代と区別するよりも、むしろ長光鍛刀工場にはほぼ同時代に腕の揃つた刀工が幾人かいて、彼らが相当多数の作品を出したと想像するほうが合理的ではあるまいか。この理由から本稿ではことさらに初代、二代と区別せずに、一括して記述するが、従来、世間では一般に直刃、小字子、小乱などで、地鉄が細かく幾分弱気味があり、姿も細目で儼しい風のもの（二代として）いる。順慶の作品は、筆者は不幸にして未見であるが、神津先生の話によると、明石の旧藩主松平家にあるものは刃文が全部沸出来で京物と見え、元土岐子爵家にあったものは長光と見えるのだが、いずれも「順慶」と二字銘で、「順慶長光」と切つたものはまだ見たことがないことである。

時代 光忠の子という。文永、永仁ころ。
 太刀が多く、まれに小太刀、短刀、薙刀、剣を見ることがある。一般に腰反で、踏張り強く反りが高い。

代第の三好利右衛門尉長光が、(一)長光の鍛冶ならは、元禄十二年没。五代三善治之助長道、明和六年没。六代三善善治長道、宝暦ころ。七代三善権蔵長道、天保三年没。八代三善権八長道。九代三善芳太郎長道。明治二十一年没。十代三善万吉長道にいたるまでつづいており、代々長道の鍛冶名と共に藤四郎の名を襲名している。

●長道八代(ながみち) 安政一岩代 二二〇万円
 「陸奥会津住三善藤四郎藤原長道」(奥州会津住三善長道)、「東奥会津住三善長道」(陸奥国会津住三善長道)三善長道福神道之三善権

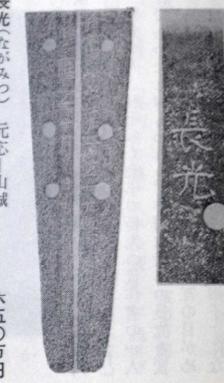
で、長光二代図があるが、長命の鍛冶ならは一代でも不思議ではない。初期作は光忠に似て、身幅やや広目で先身幅が張つて猪首切先となつた鎌倉中期の太刀姿で、大模様の華やかな丁子乱をやいて光忠と変らぬ出来があり、製作年代が下るに従つて太刀の先身幅が減じ、刃文も丁子がだんだんとおとなしくなつて焼刃の高低の差が少なくなり、互の目が多くまじるようになり、やがて物打から先は直刃状になつて来て刃がこずみ、互の目の頭が地に煙りこむように尖るようなものがある。帽子は華やかな丁子乱の場合には乱れ込み、刃が地味になつて物打辺りが直刃状になつてからは、直ぐでたるむ「三作帽子」になつてゐる。地には鮮明な乱れ映りが立つているが、長光の作にはこの乱れ映りのあらわれるものが多く、乱れ映りは長光の特徴の一つにも数えられている。正安ころになると代作、代銘が多くなり、真長、長元をはじめとする一門の鍛冶たちによつて長光銘の作刀が盛んに製作されたものとおもわれ、嘉元以降の長光はほ

八、のちに藤四郎。鈴木源藏次男で、七代目長道の養子となり、長道八代目をつぐ。初銘道長。嘉永年中命により御剣を造り藩に納める。安政二年江戸大地震にて焼失、再び命を蒙り、これを作る。世人この長道を名人と呼ぶと伝えている。朝専門人ともいふ。天保五年前から元治元年にいたる作刀がある。地鉄は小板目がよくつみ、小沸のついた直刃、互の目乱などをやき、金筋、砂流しかかるものや湯走りのあるものがある。互の目には尖りころの刃のまじつたものがある。

●長光(ながみち) 正応一備前 二八〇〇万円
 「長光」(備前国長船住人左近長光造)、「備前国長船住長光」(備前国長船住左近将監長光造)左衛門尉、左近将監。光忠の子。文永十一年より元禄二年までの紀年銘があり、その前後を入れると作刀期間がおよそ六十年間にもおよぶものがある。

とんが代作、代銘によるものではないかとももわれる。大業物。(銘鑑には長光の名跡を襲う鍛冶として建武、正平、応永、文明、永正、永禄、文祿の各代を挙げているが、ほとんど経眼しない)

●長光(ながみち) 元応一山城 六五〇万円
 「長谷部長光」長谷部。三郎。新藤五国光門人という。業物。
 ●長光(ながみち) 建武一陸奥 五〇〇万円
 「長光」月山。被杉肌の肌立った地肌、直刃をやいた作例がある。(同銘が明応ころにあり月山長光と切つている)
 ●長光(ながみち) 寛文一武蔵 三五〇万円



備前国長船住人左近長光